

年少児のグループ指導

実践記 録 //



森田 礼子

子どもの生活のすべては遊びであり、遊びを通して身体的にも、精神的にも発達してくるのであって、遊びは子どもの生活の重要な役割を占めている。

幼稚園での遊びは家庭の遊びと共通な点もあるが、幼児が集団の中で遊ぶというところに違いがあり、ここに多くの教育的意義がある。この集団の中で子どもたちをどのように指導したらよいかを考へながら指導を行なった。

四歳児の入園当初の遊びは、一般に自己中心で、数人が同じ場所ですべて遊びをしていても友達とはあまり交渉を持たず、各々が平行的に遊んでいる。このような状態から集団指導をして行く場合、幼児に集団意識を持たせ、その活動を高めていくためには、教師のいろいろな配慮が必要であって、人との関係、物との関係を相互につけながら、子どもの発達や興味にそくした適切な指導がなされなければならない。

家庭から幼稚園に入ったとき、その子どもの家庭環境や地域環境によって個人差が非常に大きく、すぐ集団生活になれる子、なかなか集団になじめない子ども（破壊的な子・攻撃的な子・我がままな子・気分がむらな子・口をきかない子・閉鎖的な態度を示す子）があるので、あらゆる子どもの状態を理解し、把握しながら指導をしていく必要がある。

幼稚園におけるグループ指導の場合は、自然発生のグループ（遊び中心のグループ）・好きな友だち同志で作らせるグループ・全く教師の意図で作る意図的グループなどいろいろなグループの作り方があるが、集団構成のメンバーは年齢、性格および構成する時期などにより方法が異なり、これらの状態に適した指導が必要になってくるものと考えられる。年少児のグループ作りの初めの段階は、仲よし友だちを作る、いいかえれば個人と個人との二人の結びつきを大切に育てて行き、更に少数グループになる可能性を留意する。また一方、共通の興味のある課題を教師が用意し、自然発生のリーダーをうまく動かし役割をつけながら遊びを進展させることにより、グループのつながりを強めていくことが考えられ、この二つのことがらを互いに操作しながら集団意識を高めて行くことが必要と思われる。

次に実際に指導した具体例を挙げてみることにする。

1 友だち作りのきっかけを作る。

○ 登園のときは、近所の友達をさそって来るように話し、帰宅のときは同じ方向に帰る友だち同志手をつながせ、グループを作ら

せて帰るようにさせた。

○ 遊具・保育材料を媒介として仲よし友達のきっかけを作る。

○ リーダー的な子どもを使って遊ばない子どもをきそう。

○ 身体測定、雨降りりのときの衣服の脱着を友だち同志で手伝い合う。

○ 教師が興味ある課題を用意し、意図的にグループを作り、グループにそれぞれの役割を与え集団遊びをする。(例えば汽車ごっこ、お客さんごっこなど)

○ 自然に発生した遊びに教師がグループの一員となつて、グループを作りながら遊びを發展させていく。

以上の結果では今までむらがつて遊んでいた状態から、数人がある程度共通の目標を持って遊ぶようになった。しかし、二人だけの結びつきは強く、何らかの原因ですぐ分散する。この期に今までの仲よし友だちが別の友達と結びつくことがあり、仲よし友だちも次第に変化してくるようになった。

2 自発的に友だちを作りながら、更に小数グループに發展させる。

(リーダーになるきっかけを作る)

① 六月上旬、机の上に桃色のビニールリボンをたくさん用意し、次のことが守れる子どもは胸にリボンをつけることにした。

・ 付添から離れても泣かない

・ 友だちをさそって仲よく遊ぶ(遊べない友だちをさそう)

・ 困っている友だちを助けてあげる(理由をきいてみんで考へてあげる)

・ 間違つたことをしている友だちに教えてあげる

○ 約束した次の日、リボンの箱に大勢集まってリボンの取り合いが始まる。級の中でもリーダー的に振舞っている子どもが、みんなを一行に並べてひとりずつ胸に結んでやっていた。

○ 消極的な子どもや全然遊ばない子どもが急に元気になり、自主的な行動ができるようになった。

○ 友だち意識がついてきた。(他人を批判し、また自己反省ができるようになった)

○ 友だちを積極的に作るようになった。(仲よし友だちが日増しに多くなつた)

○ 幼稚園を楽しみにくるようになった。(集団で遊ぶ楽しさが理解できてきた)

② 六月下旬頃、次々といろいろな色のリボンを要求し始め、赤・青・黄・白・水・紫・橙および桃色の全部で八色のビニールリボンと同じ場所に同量用意しておいた。

○ 自分の好きな色を自分の好きなとき、取りかえてつけるようになった。

○ 二学期になり、遊びグループが自然に同じ色に別れて遊ぶようになった。(全部ではないが意識なく同色が集る傾向が見えてきた)

○ 友だち同志相談してリボンを変えるようになった。(今まで仲よし友だちでも自分の好きな別々な色のリボンをつけていたが、気にするようになり、二人で相談して同じ色を決めて

つけるようになった。二人の友だち関係から三、四人の友だちと発展し、リボンの取り替えもひんぱんになり、友だち範囲が広がってきたものと思われる。

○ 遊びグループによりはつきりリボンの色が別れてきた。(例えば、赤のグループで砂場をして、次にままごとをしたい場合、ままごとをしている子どもと同じ色につけ替えて遊ぶ傾向になってきた)

○ 遊びにおいて、一般に男女の別なく、また積極的な子ども、消極的な子どもも区別なく遊んでいる。

○ 消極的な子どもはグループから落ちていいる場合もあるが、他のグループでさそいかけられ遊んでいる。(ひとり遊びや遊べない子どもがなくなる)

3、グループで話し合っって役割を決めながら遊びを發展させていくことにより、グループ意識を高めて行く。

○ 教師が一つの課題を与えた遊びの場合、または自然に発生した遊びの場合、(こっこ遊び)グループの中で話し合っって役割を決めて遊ぶ。

○ 決断がなかなか困難なグループは教師がグループの一員になり、話し合いがスムーズにいくように助力する。

○ 級でまとまっって活動させようとするとき、例えばお弁当を食べる、帰宅のときなど各グループから相談して出した当番と教師とが話し合い、グループをリードしみんなで協同していくことにより、集団意識を高めていく。

相談をしながら役割を決め合うことは幼児にとって困難な場合もある。例えば、自分の欲求や意見が通らない場合、また反対に消極的な子どもの集まるグループで、リーダーの役割を取る子どもが出てこないとかさまざまの場合もあるが、教師は常に幼児の個人個人が集団内の相手を認め、自己を生かしながら話し合いが進められていけるように、その場面に応じた指導をしなければならぬ。

4、指導の手がかりをつかむ。

○ 観察記録をとり、個々の子どものグループの動きをとらえて指導する。

○ C A Tテストを使って欲求テストを試してみた。(現在遊んでいるグループ内での役割と、自分が欲求している役割との差を調べ指導の手がかりを見つげようとしたが、このテストに入るまえに時間的に十分な研究ができず思うような結果が得られなかったので、今後の研究課題として残されている)

集団意識を高めていくためにこのような方法を考えて指導してきたが、教師はつとめて子どもたちの前面に立つことなく、今後も人間関係に目をむけ、互いに人の意見を尊重し、各々の役割に責任を持ち、だれもが喜んで遊びに参加し、集団活動が高まっっていくように心がけなければならぬと思う。

以上実際の記録について記述してみたが、不勉強で欠点も多々あることと思われるが、今後更に研究を進めて行きたいと思う。